



1989-1

No.244

【表紙】

蒔絵福寿草小盆

松田権六

1911年作

・解説は30ページ

題字デザイン・桑山弥三郎

カット・林美紀子

もくじ

特集：平城宮跡発掘三十周年

てい談

平城宮跡発掘三十周年	坪井 清足	4
	青木 和夫	
	工藤 圭章	

平城宮跡発掘三十周年のあゆみ	鈴木 嘉吉	13
長屋王宮と平城京	平野 邦雄	16

都道府県のページ

〔我が県の文化行政⑳〕

湖国の文化行政	滋賀県教育委員会文化部文化振興課	18
—文化部創設十三年—		

〔特色ある博物館・美術館紹介㉑〕

易しく、楽しく、賑やかに	京都府京都文化博物館	21
--------------	------------	----

第4回国民文化祭さいたま89	第4回国民文化祭	
公募部門 募集要項決まる	埼玉県実行委員会	23

文化庁だより

報 告

昭和63年度文化振興会議	26
・東部地区文化振興会議	26
・中部地区文化振興会議	27
・西部地区文化振興会議	28

- 文化庁行事報告及び予定……………30
- 国立劇場ニュース……………31

てい談

平城宮跡発掘

三十周年

坪井清足
青木和夫
工藤圭章

発掘のきつかけ

坪井 戦後の平城宮跡の発掘が始められる原因の一番初めは一条通りの拡幅からです。今の航空自衛隊の幹部学校が、その時分、米軍の基地で、その基地から奈良の市内へ行く道と西大寺へ行く道が、狭いので拡幅しろという話がありましてね。昭和二十五年度の文化財保護法の制定により、特に重要なものを特別史跡にすることになり、平城宮跡もその一つとして、昭和二十七年に特別史跡に改められたんです。特別史跡にしたてだから、その範囲を道路が通ったら困るといふ話があったんですよ。北へ行って行けばよいということなんですけれども、指定地の北のほうは遺跡がわかって線引いてあるわけじゃなくて、このへんまで含まれてるだろうということので、

一筆ごとに指定したから、北が凸凹なんですよ。それは字によつたためで遺構と無関係の細長い田んぼがあつたら、遺構としてはここが北限だと見当を付けていても、そこより北まで字が広がっていると、その一筆全部を史跡にしたので北の指定境界線は凸凹なんですよ。どこで線引いたらいいかわからないのでとりあえず指定地のなかでも道路を造るといふことになって、通称一条通りと呼んでいるあの通りを拡幅することになったわけです。

青木 平城宮跡の東北部に木立がありますね。戦前からぼくたちはあそこが北辺の限度だと思っていました。

坪井 それにはもう一つ前のことがあります。初めは指定地の境界線上のあちらこちらにイチヨウを植えた。大正十一年の指定の時にはそうだったんです。ところがそのあと昭和三年に岸熊吉先生が、そこより北のほうを掘って、北の大溝が出てきたので、昭和十一

年に北側を追加指定した。その追加指定の時に字でやったものだから、凸凹になったということなんです。そういうことがあつた上で日米行政協定により道路をすぐにつけるようになってしまったわけです。朝堂院跡には、内裏の北の端にしか道がなくて、今の道は畦道だったんです。そこを突っ切って道路をつけた。その工事で掘っている時、法華寺の現場へ西大寺のほうから毎日通っていた岡田宗治さんでしたよね。彼が一条通りの側溝の工事をしてるのを通勤途次に見て、掘立柱跡が出てくるのを見つけて県に報告があつた。

工藤 法華寺本堂の修理の主任をやつてた方で、たまたま法華寺でも地下調査をやつた時に掘立柱が出て、ご本人はそれを見て知っていました。

坪井 その当時、埋蔵文化財担当の中村春壽さんという人があつて見に行つた。キャンプの日名子さんも行って、ともかく道路の

側溝沿いにずっと掘立柱が出ていた。これは緊急調査しなければいかんということになったわけです。ちょうど昭和二十八年の秋の正倉院展の特別招待日でした。

それで調査しなければいかんということになったのですが、その時はもう年度の途中の十一月だったから、ろくに予算がなかったわけです。

工藤 科学研究費を取ったんですよ。

坪井 それで国営発掘に進ずる調査ということで発掘調査をして、でき立ての奈良国立文化財研究所のメンバーと、奈良国立博物館、奈良県、それから奈良女子大講師の釣田さんたちが合同で調査団を作つて調査した。

工藤 調査団長が原田淑人先生でしたね。

坪井 ともかくその時代の専門家を集めた混成部隊で発掘したわけですね。そしたら百メートルを超える細長い掘立柱の大きな建物があるということがわかった。普通の遺跡では、これだけ長大で細長い建物なんかがあるわけはないから、臨時の寄せ集めの組織じゃなくてはならない組織でやる必要がある。

そのためにはちやうど昭和二十七年にできた奈良国立文化財研究所（以下奈文研と略）に、歴史と考古の研究室、建築史の研究室があるべきだというご意見が、原田先生や藤田亮策先生からあつて、文化財保護委員会が、それに対応しようということになった。昭和二十八年の暮れから二十九年の一月にかけて、二

十日ほどの冬休みに発掘をして、三十年に恒久的な発掘調査研究体制を作ろうということになったんです。二十九年の秋に奈文研初代所長の田沢坦さんが、私に「君、平城宮跡を掘るんで、研究所へ入らんか」ということでお誘いを受けた。だから、考古分野は田中一郎さんと私とで、組織を増やそうということ、私が入ることになった。

それで昭和三十年に科学研究費の三百万の一部分で夏にもかく平城宮跡を掘りまじようというところで、二週間以上やつた。この発掘は奈文研が中心になり、奈良県や博物館の人たちにも参加してもらつてやつた。その時に問題になったのは、宮殿遺構だから、軸線をはっきりさせる必要がある。そのためには大極殿周辺がいいだろうということになった。大正時代の土田三平さんの調査で、掘立柱の築地塀の添柱の出ている遺構がいくらかわかつてるのと、大極殿を取り囲む回廊の東南の隅がわかつているので、そこを再確認して、宮殿全体の計画の中軸線を出そうという調査をしたんです。

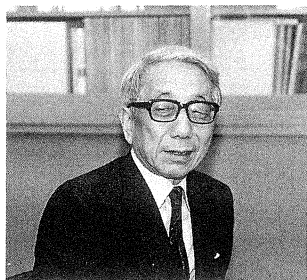
青木 そのころは第二次朝堂院なんという言葉はなかったですよ。

坪井 この調査の結果、第二次大極殿という言葉を付けました。というのは最初掘つてみて、そこで出てくる瓦が必ずしも古く考えと考へたんです。平城宮は一キロ四方と考えていられたから、関野先生が大極殿だろうと推定された所の中心が朱雀大路の突き当



工藤圭章氏

文化庁文化財保護部文化財鑑査官



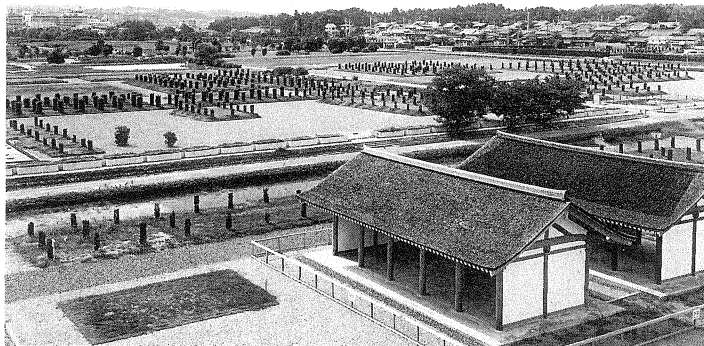
青木和夫氏

お茶の水女子大学教授



坪井清足氏

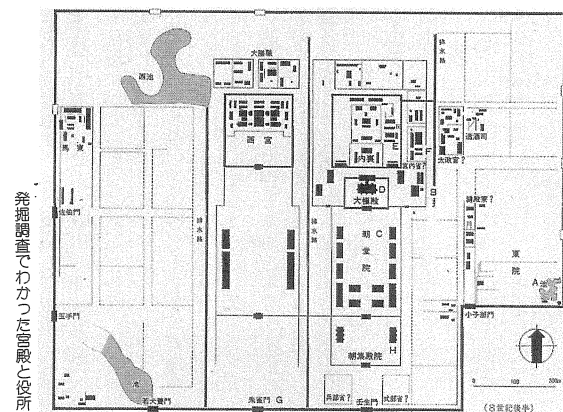
(財)大阪文化財センター理事長



復元した宮内省南殿

工藤 目にチカチカしましたものね。
青木 ぼくには嬉し涙。(笑い)。
工藤 それと日光を当てないようにはいう
で、脱脂綿でくるみましたねえ。
青木 今でもそれはやってらっしゃる。要
するに光に当たらないことと空気から遮断して
酸化させないために。

たりになく、東に寄っている。
青木 当初の指定がだいたいそうなんですの
ね。
坪井 そういうふうと考えておられたんだ
けども、藤原宮みたいに古いものが宮域の中
心にあつて、ある時期にそれがこつちに移っ
て来たんじゃないかという仮定を立ててみた
わけです。出て来たものも若干新しいですし
ね。それで第二次朝堂院、大極殿ということ
を、その時に言い出したわけです。
青木 最初は一キロ平方メートルというの
が実は約二キロ平方メートルというのは、その時
言われ始めたのですか。
工藤 広がったのはまだずつとあとです。
ちょうどそのころ奈文研で興福寺の食堂の
発掘もやってましてね。興福寺は和銅創建の
寺だということで、そこから出てくる瓦と大
極殿回廊の東南隅から出てくるのは様式的
に違う。大極殿で出て来るのは新しい。やは
り年代が違ふんじゃないかというのが、まず
第一点、第二点は、平城宮の中心の所にも
ちばち土壇の高まりがありましてね。でも今
坪井さんがおっしゃっているように、やっぱり
真ん中に本来の朝堂院があるべきであつて、
そこが第一次で、そこからここに移つたんじ
やないかという仮説を立てたわけです。それ
がずばり当たったわけですよ。その当時は
かなり新しい説だったわけです。今、大極
殿回廊の話が出ましたけども、これも上田三
平さんが、大正十一年に史跡指定され、その



発掘調査でわかった宮殿と役所

整備工事をやった時に、回廊がちゃんと回っ
てるんじゃないかということを書いていらっ
しゃるわけです。
それともう一つ、われわれは内裏回廊を築
地回廊と呼んでますが、その一部分を掘って
るんです。それは第三次で掘ることになるん
ですけれども、それが要するに今お話しがあ
つた二十九年発掘の長い建物に連なってい
くわけです。
ですから、平城宮の発掘では第一次調査の
東南隅の所でまず年代の問題が出る。第二次

坪井 話があらちこちいけれども、木簡が
出て来たので、泥棒をつかまえてから縄をな
うの最たるもので、どうやって保存するかと
いうことになったわけです。話が前後するけ
れども、ぼくが昭和四十二年に歴史博物館開
連の施設を見るためにヨーロッパをずつと回
った時に、デンマークの国立博物館のラボラ
トリーに行きましたね。そののボロレン・
クリステンセンという先生に偶然お目にかか
ったんです。木材の処理では今でも一番進ん
だ方なんです。先生はPEG法、凍結乾燥
法などを開発しておられた。PEG法という
のは、埋没木材の中から樹脂がしみ出して水
に置き代わっているのを、この水を強制的に
追い出して、合成樹脂を注入するという方法
なんです。ところがPEG法だけだと真つ黒
になるんですね。PEG法は東京国立文化財
研究所の人も知ってたわけけれども、それだ
けだと黒くなってしまふので木簡では墨の字
が読めなくなるわけです。これじゃ困るので
ぼくも気にしていたんだが、クリステンセ
ン氏のやつてる凍結乾燥法だと色が黒くなら
ないで済むということがわかったんです。そ
れを木簡にも取り入れるべきだということ
で、保存科学の沢田正昭さんにも入ってもら
って研究し、始めて、それに成功したんです。
沢田さんがクリステンセン氏の所へ留学し、い
ろいろ実地指導を受けて、それが今日に至
っているわけです。

青木 木簡が出たから歴史学者はあわて出

は三十四年で北方の官衙群、ついで平城宮跡
調査事務所を建てるので第三次調査を行っ
たら大極殿の後ろに内裏が出てきた。一次、
二次、三次ぐらいで重大な発見が、並んでず
つ出てくるわけですね。今考えたら、毎日
掘るたびに新しいものが出るという感じだ
つたですね。

平城宮跡の先駆的役割

青木 初めて坪井さんに木簡を見せていた
だいた時を、よく覚えてますけどね。まだ、
どう保存していいかわからないから、プロッ
クで小屋みたいなのを造りになって、その
中にホルマリン漬けにしたたくさん木簡が
ありましてねえ。そこへ入った目はしみる
わ、寒いわ、せつかく坪井さんが案内して
くださるので感激しながら見てただけでも辛
かったですね。(笑い)。

工藤 そうですね。まだはつきりした保存
方法が確立してないし、要するに水に漬けて
くのが一番安全だと考えられていたのです。

坪井 それまでに出てきた木製品はともか
く水に漬けておいたらある程度の変形が防
げる。ところが水に長いこと置いておくと水
が腐敗するからというのでホルマリンを入
れたんです。全くこの分野の素人ばかりだ
から入れすぎて涙がっぱい出るようなこと
になってねえ。

したというか、私なんかは最初は奈文研に
通って奈文研で作っておられたガリバン刷
の積文を一所懸命、原稿用紙に写しました。
何年もやってましたが、そのうち大量に出
ちゃって、とてもこれでは駄目だという
ようになって来ましたけれども。

発掘のほうでも三十六年暮れから三十七
年の初めにかけての近鉄の車庫の建設設計
画で西へいっぺんに広がったんじゃない
ですか。

坪井 今までの指定地の範囲はすべて遺
構があるということが、第二次の発掘で
証明された。さつき工藤さんの言われた
第三次で調査基地を造らなくてはいいか
というので、建物を建てる所を掘った
ら第二次内裏の様子がわかってきたとい
うことですね。初めは今でい
えば中心部を掘っていたわけですが、
そうこうしているうちに昭和三十
七年に近鉄が当時指定外だった土地
の買収を始めたわけですね。近鉄が
線路の西南のほう、平城宮の西南
隅に車庫を造ろうという計画をして、
買収にかかり近鉄から発掘届が出
たんです。周知の遺跡としての届が
出ましてね。その届に対して重要な
遺構が出ない限りはやつてもよ
ろしいということになった。

そういう書類があるのを、朝日新聞の記者
がすっぱ抜いたわけです。それが大
きな問題になって、平城宮跡を
保存しようという請願が国会に
まで行った。その時、太田博太郎
先生などが日本の大型の史跡が
守れるか守れないかの天王山だ、
これに失敗したら全部つぶ

されてしまうというようなお話をされて、何万人ものあらゆる人たちが署名して国会へ請願した。

青木 私は東京にいて奈良に行くたびに奈文研の坪井さんやそのほかの方々に親切にしていたので、何かお伝いできないかと思ってましたら、国会で取り上げてもらうためには、朝日という一新聞社がキャンペーンをやっただけでは十分ではないので、投書欄に投稿してみてもという話があったんです。国会議員たちは投書欄をよく読んでいてそこに出ているのを委員会等で取り上げるといっわけできないので、私の義理の兄貴がローマ史学者なんです、その前の年にローマなんかを見て帰って来たものだから、外国ではいかに長い計画で、例えばポンペイの遺跡なんか二百年も継続して発掘している、それに比べて我が国の文化財保護行政は何だというような投書をしてもらったんです。新聞でも学識経験者の投書で説得力があるといっちゃん載せてくれました。義兄は、あとでお札にタオルを一枚もらったと言っただけで、（笑い）。国会で取り上げられたかどうかは私も当時の新聞を調べないとわからないんです。ともかくそういうお手伝いしか、できませんでしたが。

坪井 それで国会で取り上げられた結果、当時の池田勇人総理大臣が、あれは国で買い上げましょうという決定をされたわけです。

そういうことで平城全域の保存が軌道に乗ったわけです。その当時のスタッフの間で一体平城宮跡の発掘調査にはどれぐらい時間がかかるかというような話になり、ちゃんとした組織が必要であるということになったんです。たまたまその時に姫路城の修理が終わって、文化財関係の定員が浮いた。それを全部奈良へ移したらいいということで、四十名を移したんです。

工藤 それが昭和三十九年ですね。今の話で、私、今でも記憶にあるのは買上げは昭和三十八年から始まったんです。その前にいろいろな先生方がお見えになって、亡くなった薬師寺の橋本凝胤さんが、大野伴睦さんを連れて来られたことがあるんです。その当時の平城宮の事務所は奈良女子大の幼稚園を事務所に替えた建物で、その中でその当時平城宮跡を買ったどのくらいするかというような話がありました。当時はまだ物価が安かったですから、二十億円くらいで買えるんじゃないだろうかという話をしたら、大野伴睦さんが、「そんな金か。国家予算からみたら小せえ、小せえ」と言われたのが、今でも記憶に残ってますね。そういうのが一つの引き金になって、三十八年から買い上げが始まったんです。

青木 五年計画でしたですね。

工藤 それが西側を掘ったことにより昭和四十年にまた指定拡大されて、段々広がって来るわけです。

坪井 建築では法隆寺競争なんかでもわかるように、建築というからには建物を建てる基準尺があるはずで、それが高麗尺であるか、唐尺であるかの問題で論争なんかがあった。建築物の調査では尺度というのが明らかにされなければできない、考古学では、そういうことはあまりシビアに考えてなかった。建築の方から学んだわけです。一方で発掘された物への対応の仕方、それをどう処理していくかが大変で、一キロ四方の中で同じ模様のものが、こっちにもあっちにも出て来るわけで、ばくばくは研究所に入った最初の半年は、そういうものを整理して登録する方法ばかりやっていました。それが今の整理するシステムとされたわけです。このシステムではカード化していたので、今、コンピュータに入れるのが、スムーズにいったと思うんです。

工藤 記号で分類して、最初はカードもハンドソートだったですけどね。記号で分類している、コンピュータ化がうまくいったわけですね。全国の遺跡をアルファベティカルなもの、と数字で全部分類するというのは、坪井さんが一番最初に開発したんです。例えば、飛鳥時代は5だと奈良時代は6だとか、そういう風にずっとやりましたね。

坪井 ただ、あれは奈文研のメインのテーマにあわせて、ああいうシステムをこしらえたんです。だから、ほかの都道府県なんかで

坪井 その当時、東の端で内裏の裏方のごみ捨て穴を掘っていたら天平末年の木簡が一括して二千八百点が出て来たんですよ。木簡はそれ以前にも最初の四十数点から増えたけれども、一度に中身が豊富になったんです。

工藤 ちょうどそのころだったですが、新聞記者たちが、「地下の正倉院」ということを言い出したのは。最初の本簡が出たころでしたか。正倉院文書に劣らないものが出て来たということです。

青木 字が出て来たために、そう言い出したんでしょう。

坪井 だから、平城の調査にはいろんな節目があるんだけど、木簡が出たというのは非常に大きいですね。地下からあれだけ生の資料が出て来るとは考えてなかったということです。

青木 本当にそうでした。飛鳥時代以前というが、古墳時代までは考古学にお任せして、飛鳥からは文献でやっていなくて、は思っていたのが、考古学のほうが、飛鳥まではもちろん、奈良時代まで下って来たというので大あわてで、ばくらどうやって生きて行ったらいいのなんて考えましたね。（笑い）。歴史考古学では、平城宮跡の発掘が、全国的にも影響の大きいお仕事だったんじゃないですか。

坪井 それと昭和三十七年の保存運動があって、国が大規模遺跡を買い上げて将来保存

はあのシステムをそのまま導入しては駄目だというのが当たり前なんです。

青木 いや、私だって6でもって奈良時代全部とはひどい、もっと細かく分けたいのかと思いますけどね。（笑い）。

整備と活用

工藤 今まで発掘の話がだいぶ出ましたけど、掘ってまた埋めるだけでは、前にどういう遺構があったかわからないじゃないか。だから、積極的に整備して、昔はどうだったかを知らしめたほうがいいんじゃないかということがありましてね。最初は遺構の出た所を覆屋で覆って見せるとか模型を造るとかいうことをしました。さらに現実に基壇を造ったり、ツゲの木を植えて柱を表したりということも、積極的に史跡を整備するということが、平城宮で始まったわけです。

坪井 整備の仕方として、どんなものがあるかというのを、昭和三十八年から三十九年にかけて工藤さんとよくともう二、三人で一所懸命に考えましたね。

工藤 一つは掘った状況をそのまま見せること。日本の遺構は地面に穴を掘ったようなものしか残ってない。あるいは凝灰岩の基壇なんかは若干残っているけれども、それ自身は雨や冬の霜にすぐやられてしまふ。だから、実物を見せるとしたら、上に覆屋をかけない

ればいかんということ、試しに覆屋を造った。地下遺構に影響を与えないで、どれだけの建物で建てられるかという検討をいろいろ行い、二十八メートル四方の覆屋のA棟を造ったんです。

青木 三棟ありますね。

坪井 地下へ影響を与えないために、遺構の上に載せた土を転圧して、その上にコンクリート・ブロックを置いて、さらにその上に鉄骨で屋根をかける。二十八メートルの屋根が大きくてたわむから、周りへバランスを付けたヤジロベエみたいなものを設計してもらったんです。

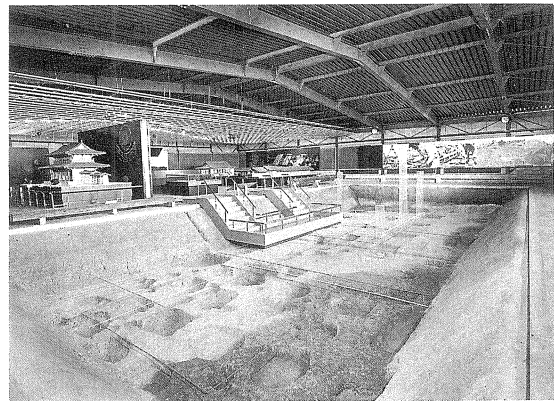
青木 今の東京ドームみたいなものは？

坪井 その時はまだそこまで技術が進んでなかったわけです。雨でも発掘できるようにしろと言われて、船舶用コンテナを二列に並べた上に屋根をかけ、その中で発掘するとか、いろんなことをやりましたよ。

青木 覆屋ができたのはいつごろですか。

工藤 昭和四十一年にできました。

坪井 A棟はそうですね。それから、B棟、C棟を造っていった。覆屋で覆って、実物を見てもらうところができたわけです。下の遺構をつぶさないで相当大きな建物を建てることのできるということで、その後全国の遺構のあるところで、開発に伴う建物をどうしても建てなければならぬという時に、ずいぶん参考となってますよね。全国の遺跡の保存と開発を進める上でのテストケースになった



遺構の露出と覆屋

わけです。

もう一つは、遺構は埋めてしまいうけれども、埋めた上に元の建物の規模がわかるようなものを作るという方法で、ツゲで掘立柱を表現し、石のものは石やコンクリートで造った擬石でいろいろ表現したんです。この方法が予算的には一番安いんでね。多賀城にも大宰府にもあるし、全国のほかの史跡にも皆あるのですが、あれは平城方式といって評判が悪いのです。だけど、予算単価が少ないので、そうなるので将来は単価を上げてやってもらわな

いでしょうがない。

飛鳥時代はどうにもならないわけです。何もないんだから。飛鳥寺なんかで、そういう形の整備ができない原因はそこにあるんです。

発掘と保存についてはばくは薬師寺の橋本

凝胤さんにえらく怒られた記憶があります。飛鳥寺で回廊と東金堂なんかは非常によく出て来たわけですよ。橋本凝胤さんには、そのまま埋めてしまわないで見せろと言われたわけですが、われわれにしてみれば田んぼを借りて掘っているものだから、とうていそんなことはできない。ですから、「埋めてしまいうんです」言ったら、「お前ら学者は自分で見たら、そんでええのか。けしからん」と怒られましたね。そういう経験もあって史跡公園という発想へずつつながって来るんです。

青木 私は明治から戦前までの史跡指定の範囲を見ると非常に広大なので、昔の内務省ってすごいんだなあと思ったんです。当時は国家に権力が集中していたから、それで大規模な指定もできたと思うんですけど、戦後の民主主義の時代には、住民の史跡保存に対する理解を図るために、現地説明会をなさって

だと思うんです。ばくなどはそんなことに気がつかないで、昔、坪井さんに「さっさと強制的に指定して買上げればいいじゃないですか」と言ったら怒られてしまいましたね、「そんなことできるもんか」って。(笑い)。

坪井 史跡の土地を持ってもらえる方の利益をどういふに守るかということ、史跡の保存の一番根源にあることだろうと思うん

今でも平城宮跡の真ん中を電車が走ってますので、あの電車に乗って「ああ、大きな休耕地がありますね」なんて言う人が、いるんですよ。(笑い)。そんなことがあると何のために買上げて保存するんだ、一体どうしたらいんだ、ということになって、昭和三十三年、四年ごろに工藤さんたちと相談して、やはり公園的な整備をすべきじゃないかということになったんです。その時にわれわれが史跡公園という言葉を使い始めたんです。

青木 歴史を教える側にしますと、歴史というのは書物の中に書いてあるばかりではない。現地にちゃんと刻まれているんだということを言いますでしよう。現地に刻まれているものが史跡公園として整備されていると、非常にわかりやすいわけです。ところが史跡公園化することによって世代によって意見が違います。今でもきつと分かれていると思うんです。

坪井 今でも史跡というのは「つわものどもが夢のあと」で、草ぼうぼうで過去を忍ぶんだという説の人が、相当おられますよね。

青木 ええ。亡くなられた文化財保護審議会長の坂本太郎先生は、あまり手を触れるのはお嫌いでしたね。

坪井 だけど、われわれにしてみれば、開発がこれだけ押し寄せてくると、そういう考えでは守りきれんというので史跡を整備したんです。史跡になった遺跡はもと造られた時は、例えば、宮殿は天皇の住まいとして造ら

です。だけど、なかなか難しい問題ですね。

青木 戦前にも時にはなさったのかもかもしれませんが、戦後は日本全国で現地説明会が行われていましたね。

坪井 現地説明会はずいぶん始まったことですね、それまでは全然そういう形ではなかったんです。工藤 現地説明会の前の日は大変でしたよ。徹夜でガリ版切ってましたからね。

坪井 その後平城の全域が一応確保されたけど、まだ三〇％しか掘れてないので、まだまだ発掘を続けなければならない。ちょうど奈良市が段々と拡張して、昔、水田だった西のほうの平城京の中心部分がどんどん開発されて来た。ですから、研究所も緊急調査に伴って平城京のあちこちの部分が発掘をした。この間の長屋王邸跡は、まさに百貨店を建てるための調査で出て来たのですが、宮跡だけじゃなくて宮を支えていた都市そのものを、破壊を防ぎ、保存しなければならぬし、特別大事なもの

の遺構をある程度残す必要があるということでも緊急調査をした。だから、宮の調査だけではなくて、奈良時代の都全体の調査ということで、奈良市と奈良県にも調査組織を作ってもらった。だから、三十年間でこれだけ中身がわかるようになるうとは、われわれには夢みたいですね。

工藤 最初はこんなになるとは考えられなかったですね。

青木 全く危険な時期というか、日本の高度成長よりほんのちよっと早く、発掘ができ

たということですね。

坪井 間に合わなくて、どんどんつぶれていく所もたくさんあるんですが。

工藤 発掘の作業も一番最初は調査員が五人くらいで休みもなくて、休みは雨降ったときで、土曜も日曜も何もなかったですよ。夏の暑い時には雨も降らなかったでしょう。一番多い時で四、五十日連続で掘ったことがあるんです。

坪井 一番ひどい時は一年間で二百六十日掘りましたよね。

工藤 とにかく掘って遺構を見つけないで頭にあって、難しい小説なんか読めないんです。読むのは週刊誌くらいでね。ほかのほうの頭はストップしちゃうんです。今思うと、ああいうやり方より、適当に休みをとって思考能力もちゃんとした状態で発掘するのが一番好ましいですね。

青木 ある程度体力の問題があるから、若い人をどんどん入れて。

坪井 それもあるし、何とか組織を活性化していくことですね。いくら機械化しても最後は人間の目と技術で掘らなければいけない。そうなる作業員十人に対して一人ぐらいは調査員として現場を監督する人がいるわけですね。石器時代の遺跡だったら作業員ではなくて自分で掘らなければならない。けども、ああいう官衙遺跡風のものだったら、作業員十人くらいは一人で監督しなければならぬ。年間に発掘する面積を決め、一チームとして

必要な人数は初め十人単位で考えた。そして期間は三ヶ月。それが四チームぐらいで交代で年四回、大きな発掘をやりましますというようなことでやってたわけです。それが今や十人が八人になり七人になり、五人くらいになつてくるんじゃないですか。

工藤 六人くらいでしょう。

坪井 果たして目が届くんだろうかという心配があるんですよ。

しかし、これからの課題はすいぶんありますね。

工藤 そうですね。今、三ヶ月を一つの区切りとして掘って、あとの九ヶ月で遺物の整理とか図面の作製、報告書の作製をする。しかし発掘が忙しくなれば、必然的に遺物の整理が、遅れて来るわけですね。

坪井 だから、報告書なんか初めのころは発掘後一、二年くらいで出せていたけど、今はもう十年ぐらい前のことが、ようやく報告書になるというようになってきて、ずいぶん矛盾が生じて来てるんですよ。

平城のフィールドを掘っているということ、それから、いろんな知識を集約できるということ、それが基盤となって埋蔵文化財センターが研究所につくられた。ここで全国で発掘調査をしている人のアドバンス・コースとしていろいろな研修が行われています。平城宮跡調査をさらにレベル・アップしていくためにも、平城宮跡は将来どうあるべきかということについて、もう一度文化庁として基本

的に考え直してもらい必要があるんじゃないですか。

工藤 よりよい発展を目指してということですね。

今、平城宮調査で育った人が、日本各地に散らばって行っています。平城宮跡はそういう意味で一つのスクールでもあった。現に埋蔵文化財センターでは、まだいろいろな研修コースを設けて指導を行っていますね。

坪井 それは初代の田沢所長にぼくが入った時に言われ、ぼくは後から入所する人に言ってるんだけど、「文化庁の文化財保護部の技官（研究職）は、結局、行政と現地での研究と博物館の展示の三位一体で、それぞれ適当な時期にそういうポストを歴任して、研究で蓄えた知識で行政をどういうふうにするかというふうなことをやるんだ」。これが非常に大事なことです。だから、単なる研究機関だというだけではなく、研究した成果を行政に反映する、あるいは博物館の展示なんかそういうものを反映して、文化庁行政のありようを正しく進めて行く。田沢所長の言葉に従ってあとの人にもみんなそう言い伝えていくのです。

特集 平城宮跡発掘三十周年

平城宮跡発掘
三十周年のあゆみ

奈良国立文化財研究所長 鈴木嘉吉



奈良国立文化財研究所が昭和三十四年以来継続して行っている特別史跡平城宮跡の発掘調査が今年で満三十年を迎えた。平城宮跡が広く世に知られるようになったのは関野貞の論文『平城京及大内裏考』からであり、関野が宮跡を実地に測量して宮域や建築配置の調査を行ったのは明治三十二年（一八九九）であったから、それから数えると九十年を経過したことになる。この間幸いにも多くの人々の支援を受けて史跡としての保存が図られると同時に発掘調査も着々と進んでいる。現在史跡指定地の面積は約百三十一万平方メートル、そのうち国有地は約九十六万平方メートルに及び、史跡地内の東辺や北辺に所在する人家密集地域を除くと買取可能な部分の九五%までも国有化が進み、東西約一・二キロ、南北約一キロの広大な区域が保存されているのである。奈良市も近年の開発・市街化の進行は著しく、指定地の周辺は住宅や商業ビルが次々に建てられる状況にあるが、そうした近代

都市の中心部に、地上では目立つような遺構や遺物が全く見られない平坦な遺跡を、これだけ広く保存した例は世界的にみても珍しく、宮跡を訪れる外国の文化財関係者からも高く評価されている。発掘調査は現在までに約三十七万平方メートルを終了した。全体の約三分の一に当たるが、一遺跡での発掘面積としてはもちろん日本最大であり、諸外国と比べてもこれを越える例はイタリアのポンペイ遺跡など二、三に過ぎない。

ふりかえってみるとここに至る道のりは決して平坦なものではない。もともと昭和三十四年の発掘調査そのものが史跡の指定解除を要求する住民の理解を得るために着手された。平城宮跡の保存顕彰運動は和銅三年（七一〇）の遷都後千二百年に当たる明治四十三年、水田の中にわずかに盛土が残る大極殿跡で記念式典が行われたのちにようやく盛り上がりを見せ、棚田嘉十郎など地元有志の大変な努力によつて朝堂院一郭の土地を国に寄附すること

で最初の基盤が築かれた。大正十一年に史跡指定が行われたが、その後昭和六年に朝堂院地区の東北方の水田中に立派な石積の溝が発見されたことから昭和十一年追加指定を行い、宮城の三分の二ほどが指定地となった。しかし以後は調査もなく、昭和二十八年に宮跡北部を東西に貫通する道路が開削された際、偶然に掘立柱建物跡が発見されたため道路敷地の一部をあわてて発掘した程度である。ところがこの新しい道路に沿って住宅や店舗が次々に建ち始めると事態は深刻化し、規制の緩和を求める住民大会が開かれるまでに至った。そのため本格的な発掘調査によつて現在は何でもない水田の下にも貴重な遺跡が存在することを証明し、それを守ることの重要性を訴えることが行政当局のまずなすべき仕事であるとして発掘が始められたのである。

指定地内の発掘で平城宮には中心の朝堂院や内裏を囲んで多くの官衙が配置されていたことがようやく判り始めたところ、宮城の西方三分の一に当たる未指定地に近畿日本鉄道が検車区を建設する問題が起り、昭和三十七年には平城宮跡保存の全国運動が展開された。その結果翌年から、保存のための土地買収経費が予算計上されることとなり、方八町に及ぶ宮城全体を保存する目途がついた。我が国の文化財保護行政上はじめての画期的措置である。宮城の外郭を示す門や築垣の発掘が行われ、昭和四十年には西方地域が史跡に追加指定された。こうして保存問題も一段落と思

平城宮跡ではこうした発掘と平行して遺跡の修景整備事業が進められている。発掘された遺構はそのまま露出しておくと破損してしまうので、一部に覆屋をかけてこを遺構展示館としているほかは保存のため埋め戻すのが原則である。そしてその上部に掘立柱の場合は樹木で柱位置を示し、基壇建物では基壇と礎石を復元的に造成するなどによって宮殿や官衙の建物配置が判るようになっている。さらに宮内省と推定される官衙地区や南面の大垣では実物大の建物や築地塀の復元を行い、より立体的に古代の宮城の姿が実感できるよ

たのも大きな収穫といえよう。
遺跡は四、五期の重複をもち、宮内の建物は短期間で建て替えられている。こうした各期の年代や官衙名等の推定には木簡や墨書土器が重要な役割を果たしている。特に木簡は地方から都へ送られた物資の動きや役人の勤務状況のような当時の制度の実態を明らかにする点で貴重な史料である。瓦や土器など出土遺物がほぼ二十年単位で細かく分類できるのも、伴出する木簡に年号が記されているためで、平城宮での分類が全国の奈良時代遺跡の基準となっている。平城宮跡の発掘は前半の十五年ほどは保存地域を確定するため周辺の官衙地区や門などを調査したが、後半では中心部の解明に力を注ぎ現在はその約四分の三まで進んだ。中心部はあと数年で終わる予定で、その後は東院地区の本格的調査が計画されている。

文化財を火災から守ろう

来る1月26日(木)は「第35回文化財防火デー」(主唱 文化庁・消防庁)です。

この日は、昭和24年に法隆寺金堂の壁画が焼損した日にあたります。

また、毎年この時期は、特に火災が多く発生していることから、この日を中心として文化財を火災、震災、その他の災害から守るため、全国的に文化財防火運動を展開し、国民一般の文化財愛護思想の高揚を図っています。

みんなで守ろう文化財

1月26日は文化財防火デーです

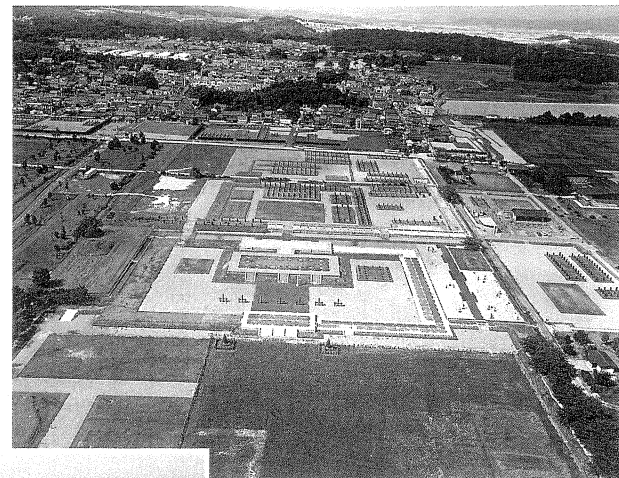


文化庁・消防庁

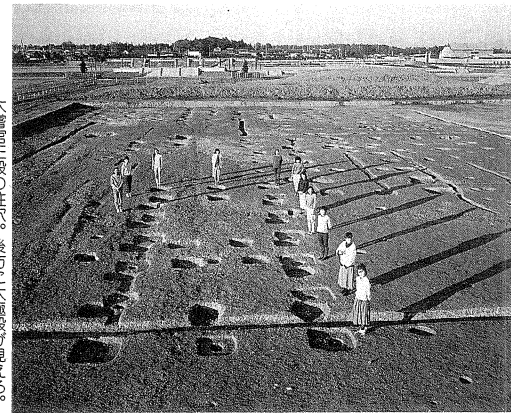
うに試みている。西部地区には発掘品を展示する資料館も設けてある。これらは発掘の成果を広く理解していただくために昭和四十年ころから少しずつ進めてきたが、昭和五十二年に文化庁により平城遺跡博物館の基本構想がまとめられ、以後はかなり急ピッチで整備が行われている。基本構想は平城宮跡が歴史を学ぶ博物館であると同時にレクリエーションの場としても活用されることを打ち出しているが、現に宮跡を訪れる人は年間四〇万人以上に達し、発掘・研究の成果と共に広大な緑の空間を楽しんでいるのである。一昨年から発足した関西学術研究都市建設計画の中でも平城宮跡は文化財ゾーンとして組み込まれ、朱雀門の建設や博物館施設の充実など整備の

一層の促進が望まれている。二十二年後の遷都千三百年までには平城遺跡博物館が完成することを期したい。
なお調査部の発掘は近年では開発のため破壊が進む京の部分に手をさくことが多くなつた。なかでも昭和五十一年に発掘した宮東南方の庭園遺跡、一昨年から継続中のその北に接する長屋王邸宅跡などは大きな成果をあげており、特に後者は三万点にも及ぶ大量の木簡が出土して当時の貴族の生活や経済の実態が明らかになりつつある意義は大きい。宮とともにこうした京内の遺跡も奈良時代の歴史や文化を知る上に重要であり、両者を並行して調査しなければならぬが、それには研究所職員の不足が最大の悩みとなっている。

えた昭和三十三年に、今度は宮跡東側で国道バイパスを通す計画が持ち上がったため、その予定線を発掘すると従来考えられたように平城宮が約一キロ四方の正方形の区郭ではなく、東院が張り出すことが明らかになった。そのため路線の変更を求め、昭和四十五年には東院地区を追加指定することができた。その後は昭和五十四年に宮城南辺の旧二条大路部分も追加している。発掘の結果、それまでの指定境界が南辺築垣までであり、朱雀門や



平城宮の大極殿と内裏の整備状況



大嘗宮正殿の柱穴。後方に大極殿が見える。

壬生門など重要な遺構の南半分が保存区域の外となることが判ったためである。このように昭和三十四年以降の発掘調査は遺跡の解明と同時にそれをテコとして保存区域の拡大に大きな役割を果たし、ようやく今日宮城全体を保存することができるようになったのである。
現在までの発掘調査による成果のうち主なものをあげると、まず第一に東院の張り出しがあって、藤原宮や平安宮のようになり正方形の区画ではなく、その用途も特殊な性格であつたらしい点がある。東院の東南隅には石組みを並べた池を中心

建物を配した庭園があり、宮内には大極殿・朝堂院のような儀式空間、天皇の住まいである内裏、それらを取りまく官衙群といった政治用施設だけでなく園遊の部分もあったことが判明した。中心部では朱雀門を入った正面に第一次大極殿・朝堂院があり、その東側の従来から大極殿・朝堂院と推定されていた壬生門正面区域が、聖武帝からの第二次のものであることが判明した成果が大きい。特に第二次区画が藤原宮と同系列の建物配置をもち、次の平安宮へも継承される形態であるのに対して、第一次大極殿は広い前庭をもつ高い台の上に位置して、あたかも中国長安の大明宮含元殿に似た特異な形式をもつ点は大極殿の歴史を考える上で大きな問題を投げた。さらに実は第一次から第二次へと移行したのではなく、第二次区画にはほぼ同じ配置で掘立柱による前身の大極殿・朝堂が存在し、それは第一次と併存した。藤原宮の大極殿・朝堂院が瓦葺、基壇付きの中国宮殿風建築で造られた後は、中心の儀式用建物や四面の築垣・門は中国式、内裏や官衙は掘立柱の日本式建物という図式が成り立ったものと見られていたのがあったが、平城宮では当初儀式用空間が二区画あつて一方は特異な中国式、他方は掘立柱式という予想外の宮殿形式である。何故このような形式が生まれ、第二次には通常の基壇付き建物に改作されたのか、平城宮の大きな謎となっている。なおこの第二次区画の中央の空地に大嘗宮の遺跡が三回分発見され

長屋王宮と平城京



東京女子大学教授 平野邦雄

今からわずか数か月前、昭和六十三年八月、平城京の左京三條二坊七・八坪の地から、「長屋親王宮」の存在を示す推定三万点にもものぼる木簡が発見され、学界に衝撃を与えた。

すでに、おなじ條坊のなかの南に隣接する六坪の地から、昭和五十五年の初め、石組・石敷の園池と、それに付属する建物跡が発掘されていて、「北宮」という木簡が発見されていた。「北宮」とは、長屋王の妃吉備内親王の殿舎であろうと思われる、今回の木簡にも「北宮」とある。長屋王は天武天皇の孫で、吉備内親王と結婚したが、内親王もまた草壁皇子の女でいずれも名門中の名門である。この殿舎は、少なくとも二、三、六、七坪にわたるから、平安京の撰閑家の大邸宅で四坪を基準

とするものと共通するか、あるいはさらに広く六坪におよぶかも知れぬ。この殿舎がもし長屋王の「佐保宅」と別なものとすれば、王が結婚によって、内親王宮に同居し、そのため「長屋親王宮」と呼ばれるようになったとも考えられる。

その家政機関は、木簡を垣間見ただけでも膨大なもので、家令・家扶・家従・書吏の四等官はじめ、多くの帳内・資人を中心に、家令所・政所以下、多種類にのぼる司・所をもつて構成されていた。その所有する封戸・水田・御園などから送られる物資や、朝廷から給される俸禄・食料なども記録されている。これらの実体は、律令や六国史などによって知ることはできない。木簡の解説・解析を通じてはじめて明らかになる分野である。

長屋王は剛直な政治家で、仏教をもあつく信じた。木簡の主たる年代にあたる和銅・養老（七〇八―七三二）の間に、王は式部卿―大納言―右大臣と進み、従三位―正三位―従

二位にいたり、内親王は三品であった。家政機関はこの二者のそれを合体したものであろうか。このころがもっとも充実した時代にあたる。王はこの後左大臣、正二位となるが、突如、左道を学び、国家を傾けようとしたとの罪に問われ、自尽せしめられ、妃の吉備内親王は許されるが、王のあとを追いつた命を絶つのである。「長屋親王宮」という称呼は、律令制からいえばありうべきことではないが、一般にそう見られていたのであらうか。もしそうすれば、聖武天皇と光明子には、皇嗣としての男子はなかったのだから、王を皇嗣に擬する空気があったことになる。藤原氏と衝突する理由はそれだけで十分である。

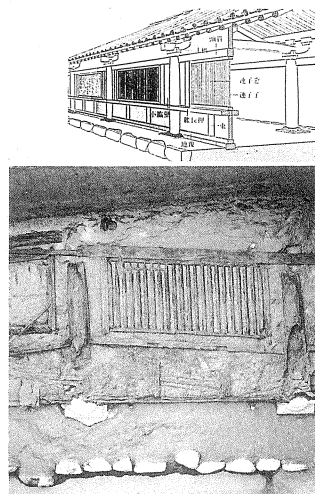
平城宮発掘三十周年を迎えるときに、悲劇の長屋王は、一大史料群という歴史学にたいするこよなき贈物を残すことによって、現代によみがえったといわねばならぬ。

もう一つ、昭和五十一年から奈良国立文化財研究所によって発掘の続けられた山田寺がある。塔跡・金堂跡・北面回廊跡が発掘され、最後の段階になって、東面回廊が、かつての建築遺構のまま地下からその姿を現したのである。山田寺もまた悲劇の死をうけた蘇我倉山田石川麻呂の寺である。石川麻呂は、大化改新に参加し、中大兄皇子、中臣藤原鎌足とともに、蘇我本家を滅亡させ、右大臣の地位についた。山田寺は、この本宗家の飛鳥寺に対する寺として造られた。

長屋王宮跡から出土した「木簡」



山田寺東回廊（上は復原図）



しかるに、石川麻呂は大化五年（六四九）、同族の蘇我日向に讒せられ、子の興志とともに山田寺で自害する。その後、寺の資財が没収されたとき、書物の上に「皇太子の書」と題し、重宝の上には「皇太子の物」と記してあったのを見て、中大兄皇子はみずからの過ちを悔み、悲しみ歎き、日向を事実上の流刑に処したという。

山田寺の東面回廊は、東側の丘陵からの土砂流によって、一挙に倒壊し埋没したと推定される。その建築遺構は、礎石上の円柱、柱上の大斗、柱間の貫・長押、また下地をわたした、木舞を組んだ土壁、連子窓などが数間分にわたって、倒壊した形のままで発掘されたのである。現存の法隆寺よりも古い、飛鳥様式をそのまま長く維持した寺院の遺構が、地中から現代によみがえったといわねばならぬ。長屋王といい、蘇我石川麻呂といい、平城京と飛鳥京の双方において、その遺跡をもつとも完全なかたちで再現させたことは、歴史

の奇しき運命といつてよい。

これと共通する遺跡に、福井の一乗谷朝倉氏の遺跡がある。朝倉氏は敏景から義景まで五代、この一乗谷に城郭と居館をかまえ、戦国武将として初期の城下町を形成し、家臣を集住させ、商人もこの谷に店舗を営んだ。しかし、一向一揆に手を焼き、將軍足利義昭を迎えながら、策なくして織田信長に屈する。天正元年（一五七三）信長の軍は一乗谷に乱入し、谷間を焼き払い、義景は力つきて自殺する。朝倉氏は一挙に滅ぼされ、後を継ぎ近世城郭を築くものもなかったから、遺構はすべて地下に埋もれ、北国の風雪のなかに数百年にわたって当時のままの姿を保ちえたのである。この遺跡も、発掘によってその全容を地上に現しつつある。

長屋王の宮宅も、王と妃の死により、建物は破壊され、資財は没収されたのであろう。それでは養老から王家の亡びる神龜六年までの木簡群はどうしたのであろうか。どこかに眠っているにちがいない。木簡もまた一挙に廃棄されたため特定期間の王家の姿が凍結されたように残ったのではなかろうか。

さて、朝倉遺跡が領主の城・館・庭園はもちろん、武家屋敷・商家を含む広大な遺跡であることはいままでもないが、長屋王宮も山田寺も、宮内にある遺跡ではなく、京城に存在している。飛鳥京、平城京ともに、京城に存在する遺跡こそが重要であり、歴史学から

みても無限のひろがりをもつ。かつて奈良国立文化財研究所のなかに、平城宮発掘調査部が設けられたのは、平城宮の発掘調査と保存を目的とするものであった。

平城宮跡は、大正十一年の史跡指定のあと、昭和四十年、近畿鉄道の車庫建設に端を発し、全域に指定が拡大されたが、昭和四十一年、さらに「東院問題」がもち上がった。これは大阪万博のため国道二十四号線バイパスを、平城宮跡の東辺に沿い、旧左京一坊大路を復原する形で通そうとしたことに起因する。そこに東院地区が発見されたため、切迫した政治問題となった。道路建設は宙に浮き、ついに昭和四十三年四月、建設省は着工の中止を決め、この部分を加えて、平城宮は一二四ヘクタールに上る特別史跡となったのである。

それからですと二十二年、同研究所は宮跡の発掘・整備・保存に力を尽くした。現在の平城宮跡があるのはその努力のたまものである。しかし、その途中から、宮外、つまり平城京の発掘の方がはるかに増加している。しかしその保存はまったく遅れているのである。長屋王宮はかけがえのない一級の遺跡であるが、大阪の一デパートの営利事業のために破壊される。木簡は辛うじて取り出し得たが、遺構は永遠に失われるのである。

平城宮跡発掘三十周年を迎えるに当たって、「平城宮跡発掘調査部」を、「平城京跡発掘調査部」に改め、あらたな段階に立ち向われるよう心から希望したい。

国立劇場ニユース

●初春歌舞伎公演

野口達二 改訂
歌舞伎 外郎壳
十八番の内
河竹黙阿弥 作 尾上松緑 監修
天衣紛上野初花 直侍と三千歳
上羽根の禿
大喜利
下供 奴
1月3日(火) 28日(出)

新春の歌舞伎公演は、毎年賑やかな顔触れでお楽しみいただける狂言を選んで上演しています。今春も、国立劇場の初春役者松緑を筆頭に、富十郎、菊五郎という人気実力ともに備わった花形俳優に加えて、二年振りに出演する玉三郎を得て、多彩な顔揃えで幕を開けます。

正月らしく華やかな歌舞伎十八番、艶やかな情趣溢れる生世話物の傑作、そして軽快で躍動感に充ちた歌舞伎舞踊の醍醐味と魅力的な演目の並んだ初春歌舞伎公演で、初芝居にふさわしい、ゆつたりした雰囲気と華やいだ気分を満喫していただきたいと思ひます。

▲外郎壳

初演は享保三年(一七七八)、二世團十郎が『若緑勢曾我』の一部として演じたものです。「うしろ」は小田原名産の喉切りの薬の名称で、売り立ての長ゼリフを早口で言い立てるのが眼目となっています。のちに、七世團十郎が歌舞伎十八番を制定した際、そ

の一つに加えました。

今回は松緑の工藤、左近の曾我五郎という祖父と孫の顔合せが見もので、富十郎、菊五郎、玉三郎らが顔を揃え、賑やかな舞台をご覧にいただけます。内容的には父の仇・工藤祐経をねらう曾我兄弟が外郎壳に扮してその機会を窺うという設定の挿話が中心になっており、今回は野口達二氏が新たな着想も含めて改訂した脚本で採りあげます。



▲天衣紛上野初花

河竹黙阿弥の傑作として名高い本作から、今回は御存知「三千歳直侍」の件りを選んで上演します。この作品は明治十四年(一八八二)ですが、江戸の生世話物独特の纏綿たる情緒と、色濃く描かれた情感、失われてしまった懐かしい生活感覚等に充ちた狂言として知られています。今回は菊五郎の直侍、玉三郎の三千歳という美しさを誇る両人の久々の顔合せでお送りします。歌舞伎ならではの、洗練された魅力に充ちた色模様を是非お楽しみ下さい。

▲羽根の禿・供奴

この二つの小品は、いずれも人気の高い風俗舞踊として有名です。いかに

も正月らしく羽根つきをする可愛らしい禿姿から、一転して元氣溢れる威勢のいい奴姿に、歌舞伎界屈指の舞踊の名手・富十郎が軽やかに変身するのが見どころとなるでしょう。

●その他の公演

●民俗芸能公演 (小劇場)
郷土の三番叟のいろいろ 14日・2時

●舞踊・邦楽公演 (小劇場)
明日をになう新進の舞踊・邦楽鑑賞会 20日・6時

●邦楽公演 (小劇場)
邦楽鑑賞会―三曲・長唄― 27日・6時/28日・2時

●演芸 (演芸場)
新春国立名人会 3日・8時 1時

●能楽 (千駄ヶ谷能楽堂)
花形若手演芸会 21日・1時

●能楽 (千駄ヶ谷能楽堂)
国立名人会 28日・1時

●能楽 (千駄ヶ谷能楽堂)
能楽鑑賞会 4日・1時

●能楽 (千駄ヶ谷能楽堂)
能楽鑑賞会 14日・1時半

●能楽 (千駄ヶ谷能楽堂)
能楽鑑賞会 20日・6時半

●能楽 (千駄ヶ谷能楽堂)
能楽鑑賞会 27日・6時半

●文楽 (大阪日本橋文楽劇場)
初春文楽公演 3日・25日 11時/4時

伊達娘恋緋鹿子・傾城恋飛脚他

詳細につきましては左記へお問合せ下さい。

〇六二四三二二五三三 (文楽劇場公演)

編集後記

日本人の心のふるさと言われる地大和は私たちの心を引きつける何かを持っているところだ。
律令体制が確立されつつあったころ飛鳥を中心に転々としていた都も、結局は奈良の地に落ち着きます。政争、苦役、重税、平穏とは決して言えない時代。そんな時代にこそ花開く文化の華麗さがあります。万葉の心とも言われるように、この時代の文化が今でも私たちの心に、ある一定の面積を持ちつつ広がりを見せています。数ある文化財は、そんな時代の文化を映し出す鏡でもあるのです。宮跡の発掘が持つ意味の大きさを改めて感じます。
時代が移り、政治や経済さらには文化の仕組みが変わってしまっても、今だに時を超えて私たちの心に訴えかけてくる何かがあります。あおによし奈良の都 なぜか心魅かれる昨今です。
(0)

TEL 〇三二六八二二四二(代表)

広告の問合せ・申込み先

株式会社 きょうせい 営業課

〒100東京都千代田区有明3丁目2番2号

発行所 株式会社 きょうせい

〒100東京都千代田区有明3丁目2番2号

〒100東京都千代田区有明3丁目2番2号

電話 〇三二六八二二四二(代表)

振替口座 東京 九一六二一

印刷所 ㈱行政学会印刷所

年間購読料 二、一六〇円(送料共)